

つばは微笑む

作
小島ちひり

【登場人物】

鹿野千代子（16）女学校学生

田村長吉（45）元帽子職人

田村喜佐子（40）長吉の妻

鹿野尚一郎（25）陸軍幹部候補生

窪田はつ（20）尚一郎の幼馴染

黒田鈴彦（42）医者

平山とね（22）看護婦

○田村家・居間

田村喜佐子(40)が、そわそわしながらちやぶ台を拭いたり、帽子を置きなおしたり、ため息を吐いたりしている

田村長吉(45)が入って来る

長吉 どうした？

喜佐子 なんだか緊張しちゃって

長吉 どうして？

喜佐子 だって、お客さまなんて久しぶりでしよう？

長吉 そうだけど、千代ちゃんじゃないか

喜佐子 そんな緊張する相手じゃないだろう

長吉 そうなんですけど、でも・・・

なんだか気持ちいが浮かれてしまっ

長吉は席に着く

長吉 いいことだな

喜佐子 何が？

長吉 胸が躍ることがあることは

喜佐子 踊ってます？

長吉 胸に手を当ててごらん

喜佐子、胸に手を当ててみる

長吉 どうだい？

喜佐子 ものすごく、ドキドキしています

長吉 踊っているじゃないか

喜佐子 これは踊っているって言うんですか？

長吉 でも、悪いことに緊張しているわけじゃない
喜佐子 確かに

長吉 淡々とした日常に、刺激がやって来る
それに対して緊張するのはやむを得ない
だったらそれを受け入れて、ただ待つしかない

喜佐子 なんだか話が壮大になって来ましたね
長吉 さあ、深呼吸

長吉、立ち上がり、深呼吸を始める
喜佐子も一緒に深呼吸をする
間

喜佐子 なんだか

長吉 緊張していることが馬鹿馬鹿しくなって来ました
そうかい

M①が流れる

○駅

鹿野千代子(16)が駅を歩いている
立ち止まり、ポケットから手紙を出す
手紙を握り直し、ポケットにしまうと
駅を立ち去って行く

○田村家・居間

M①が消える

玄関から千代子の声がする

千代子 ごめんくださーい
喜佐子 あら！

喜佐子は嬉しそうに立ち上がり、居間を出ていく
荷物を持った千代子と喜佐子が入って来る

千代子 お久しぶりです、叔父さま

長吉 いらっしやい

千代子 急にすみませんでした

長吉 いいんだよ

喜佐子 さあさ、こんなところに立っていないで
荷物置いたら？

千代子 はい

長吉 帽子、預かろうか？

千代子 ありがとうございます

千代子は長吉に帽子を渡す

喜佐子 どうぞ

千代子 ありがとうございます

千代子が座ると、喜佐子と長吉も座る

喜佐子 驚いたわ

突然夏休みをこちらで過ごしたいって言うから

千代子 そうですよね

喜佐子 何かあったの？

千代子 え？

喜佐子 具合が悪いとか

千代子 まさか

喜佐子 そう？

それならいいんだけど

千代子 どうしてそんなことを？

喜佐子 だって、若者がせっかくの夏休みを

こんな田舎で過ごしたいなんて

千代子 田舎だなんて

ここだって東京府じゃないですか

喜佐子 でも山の手からずいぶん遠いでしょう？

千代子 お二人はどうして多摩に？

長吉 僕のためだよ

千代子 叔父さま？

喜佐子 そう

こつちだったら静かだから

長吉さんの療養にいいかなって

千代子 そういふことだったんですね

喜佐子 そう、だから千代ちゃんも

何処か具合が悪いんじゃないかって

千代子 それは大丈夫

そういうことはありません

喜佐子 じゃあどうして？

千代子 たまには家から離れてのんびりしたいなって

喜佐子 喧嘩したの？

千代子 どうしてそうなるんですか？

喜佐子 だって

長吉 いいじゃないか

喜佐子 あなた？

長吉 若者にだって僕らには及ばない事情があるだろうさ

喜佐子 それを聞きたいんじゃない

長吉 若者で遊ぶのはよくないよ

君だったら嫌だろう？

喜佐子 そうね

長吉 ごめんね、千代ちゃん

千代子 いえ

しばらくお世話になります

喜佐子 こちらこそお世話します

千代子 ありがとうございます

喜佐子 じゃあ、ご飯にしましょうか

千代子 お手伝いします

喜佐子 ありがとうございます

長吉 じゃあ僕は荷物を部屋に運んでおくよ

千代子 ありがとうございます

三人は居間を出ていく

○鹿野家・廊下

鹿野尚一郎(25)が千代子の部屋の前に来る

尚一郎 千代子お

お父さんとお母さんが呼んでるぞ！

おーい、千代子お

返事がない

尚一郎 千代子？ 開けるぞお

尚一郎、一度いなくなる

すぐに戻って来る

手には紙を持っている

尚一郎 あいつ、やるなあ

尚一郎、立ち去る

○鹿野家・居間

千代子と喜佐子が掃除をしている

帽子ひとつひとつから丁寧に埃を取る

棚の中から瓶を見つけた

千代子は瓶をまじまじと見る

喜佐子 それはいいから

千代子 あ、はい

平山とね(26)の声がする

とね こんにちはー

千代子 はい

喜佐子 ちよつと出てくれる？

千代子 はい

千代子は居間を出ていく

喜佐子は瓶を握りしめ、一瞬迷うが台所へ向かう

○田村家・玄関

黒田鈴彦(42)ととねが玄関に立っている

千代子が出てくる

黒田 こんにちは

千代子 こんにちは

えっと・・・

黒田 医者黒田です

こちらは

とね 看護婦の平山と申します

千代子 姪の鹿野千代子です

あの・・・

黒田 検診です

長吉さんの腕のね

千代子 悪いんですか？

黒田 腕がなくなってるわけだからね

時々様子をみないとね

千代子 そうなんですか

喜佐子 先生、こんにちは

どうぞ、奥へ

黒田 ええ

千代子 あの

黒田 はい？

千代子 あ、いや、平山さん

とね とねでいいですよ

千代子 とねさんは、どうして・・・

いや、今はお忙しいですよね

喜佐子 検診が終わったらお話ししたら？

とね 構いませんよ

千代子 ありがとうございます

後ほど

黒田 じゃあ、私たちは奥へ

喜佐子 はい

よろしくお願いいたします。

黒田・とねは出ていく

千代子 叔父さま、まだ痛むんですか？

喜佐子 寒くなったり、雨が降ったりするとね、痛むみたい

千代子 大変です

喜佐子 そうね

○田村家・居間

黒田・とね・長吉が入って来る

とねは黒田の後ろで、メモを取っている

黒田 どうです？ 調子は

長吉 まあまあです

黒田 眠れています？

長吉 最近は、夜中に起きることも少なくなりました

黒田 薬は？

長吉 ちゃんと、朝昼晩

黒田 姪御さん、いつから？

長吉 一昨日からです

喜佐子 はもう喜んで

一緒に畑にも行っているみたいです

それはいいですね

長吉 ・・・うちにも子どもがいたらよかったですけど

黒田 それは、授かりものですから

長吉 そうですね

たまにね、間違っていたのかなって思うんですよ

黒田 間違い？

長吉 僕が戦争に行ったことも

彼女と結婚していたことも

とね そんなことおっしゃらないでください

長吉 僕が、欲深かったんですかね

黒田 姪御さんはいつまでいらっしやるんです？

長吉 夏休みが終わるまでかな

黒田 台風は、危ないこともたくさんありますけど

悪い空気がかっさらってくれますよ

とね 先生？

長吉 相変わらず、不思議なことを言いますね

黒田 じゃあ、私たちはこれで

長吉 ありがとうございます

長吉・黒田・とねは部屋から出ていく

○田村家・廊下

千代子と喜佐子が廊下を掃除している

喜佐子 とねさんに何を聞きたいの？

千代子 秘密です

喜佐子 恋の相談？

千代子 どうして見ず知らずの人に

そんな相談するんですか？

喜佐子 女学生の悩みと言えばそれかなって

千代子 違います

喜佐子 なんだ、つまらないの

私があなたぐらいの時にはもう

長吉さんと手紙のやりとりしていたって言うのに

千代子 おじいさまは結婚に反対していたんですよね？

喜佐子 そう

軍人の娘を勲章のないヤツに嫁がせるものかつて

千代子 どうやって説得したんですか？

喜佐子 だから、勲章を取りに行ったのよ

千代子 勲章？

喜佐子 つまり、戦争に行ったの

千代子 それで、腕が・・・

喜佐子 そう

逆に言えば、腕がなくなつたから

勲章をもらえたようなものだけど

千代子 それでよくおじいさまが納得しましたね

喜佐子 自分が言つちやつたからね

勲章があれば結婚していいって

千代子 逆説ですよね？

喜佐子 間違つてはいないわ

千代子 あのおじいさまに立ち向かうなんて本当にすごい

喜佐子 それ以外に望むものもなかったしね

千代子 でもそれでおじさまは

お仕事できなくなつちやつたんですよ

喜佐子 どうなるかと思つたけど、恩給でなんとかね

千代子 おんきゆう？

喜佐子 怪我や病気で働けなくなつた兵隊さんにはね

国からお金が出るのよ

千代子 へえ、知らなかつた

喜佐子 あなた、軍人の家に嫁ぐんでしよう？

そんな調子で大丈夫なの？

千代子 いいえ、私は嫁ぎません

喜佐子 え？

黒田ととねと長吉が入つて来る

黒田 終わりましたよ

喜佐子 ありがとうございます

とね さつき、何か聞きたいって

千代子 お時間大丈夫ですか？

とね もちろんです

はい、先生

黒田 じゃあ、私は先に

とね ありがとうございます

千代子 じゃあこちらに

黒田 また来ます

お大事に

長吉 そこまで送ってくるよ

喜佐子 はい

じゃあ黒田先生、また

黒田と長吉は立ち去る

喜佐子は台所へ向かう

○田村家・居間

とねと千代子が入って来る

千代子 お忙しい時にすみません

とね 私も喜佐子さんとお話ししたかったので

千代子 叔母さまに？

とね ええ、奥さまから見

てご主人の様子とか

問診だけではわからないこととか

千代子 そういうことですか

看護婦さんも大変ですね

喜佐子がお茶を持って入って来る

喜佐子 どうぞ

とね ありがとうございます

喜佐子は座る

とね それで、聞きたいことって？

千代子 とねさんはどうして

看護婦さんになったんですか？

とね 看護婦になった理由ですか？

千代子 はい

とね そうですね

祖母がお産婆だったんで

私もお産婆になるつもりだったんです

でも、学校の先生が

これからは看護婦が活躍する時代だからって

喜佐子 勧められたの？

とね そうです

喜佐子 優秀なのねえ

千代子 そうなんですか？

喜佐子 当たり前よ

試験通らなきゃなれないんだから

千代子 試験があるんですか？

とね ええ、看護学校や養成所を出て

試験を受けて、合格したらなれます

千代子 看護婦って優秀な人しかなれないんですね

喜佐子 しかも学校に行かせられる家の子だけよ

千代子 叔母さま・・・！

喜佐子　それが現実でしよう？

とね　私はこの仕事好きなんですけど

やっぱり、病気の方のお世話をするのは
身分の低い人がするものだって思う人もいるので

喜佐子　文明はとつくの昔に開花したって言うのよね

とね　私、それでも時代が進んでいくって

素晴らしいことだと思っんです

だって、救えなかった命が

どんどん救えるようになって行くんですもの

喜佐子　素敵ねえ

とね　すいません

なんだかお恥ずかしいことを・・・

喜佐子　いいのよ

私にはそんな志なかったし

なんだか羨ましいわ

千代子

さつきから黙っちゃってどうしたの？

千代子　すごいなあって思って

喜佐子　本当

とねさん、立派ね

とね　いえ、そんな

私なんかまだまだです

千代子　どうして黒田先生のところで

働くことになったんです？

とね　たまたま学校の紹介で

ちようど黒田先生も看護婦を探していたそうで

喜佐子　そうだったの

黒田先生が来てくれて助かったわ

昔はお茶の水まで通っていたから

千代子　それは遠いですね

喜佐子 あの人、人の多いところで歩くと人目が気になるしね
千代子 そういうものなんですね

先生はどうしてこちらに？

とね さあ、詳しくはわかりませんが

前は軍医をしていたそうですね

千代子 軍医？

とね でも、自分は市民を助けたいと思って

こちらで開院したそうですね

千代子 何があつたんですかね？

喜佐子 詮索しないの

とね 私もそれ以上のことは・・・

喜佐子 で、聞きたいことは聞けたの？

千代子 はい

ありがとうございます

喜佐子 ごめんなさいね、長々と

とね いえ、こちらこそご馳走さまでした

喜佐子、千代子、とね立ち上がる

喜佐子 またお茶しましょうね

とね ありがとうございます

では

千代子、とね、居間を出ていく

千代子ととねの声がる

千代子 ありがとうございます

とね また来ます

千代子、居間に戻って来る

医者は科学とともにあるのだから

とね 喜佐子さんは千代子さんを応援したいんでしょうね

黒田 あの人も進むべき道に進まなかった人だからな
進むべき道ってなんなんでしょうね

黒田 人間は、目の前にある仕事を

淡々とこなすだけでいいんだ

とね じゃあ、働けない人は？

黒田 働けない人？

とね 例えば

長吉さんは今はもう

職人として働けないじゃないですか

長吉さんはどうすればいいんです？

黒田 長吉さんは

「生きる」と言う仕事を淡々とこなしている

とね 先生、逃げましたね？

黒田 うるさい

明日の往診の準備だ

とね はあい

とねと黒田は立ち去る

○田村家・居間

長吉・喜佐子・千代子はお茶を飲んでいる

長吉 千代ちゃんの煮物、おいしかったよ

千代子 ありがとうございます

喜佐子 あら、私は？

長吉 いつも通りつつがなく

喜佐子 素直に褒めてくれればいいのに

千代子 いいですね

喜佐子 何処か？

千代子 違いますよ、ちやぶ台です

喜佐子 ちやぶ台？

千代子 面白いですね

長吉 この丸い机を囲むとなんだか自由になれます

長吉 そうか、千代ちゃんちは

千代子 いまだにお膳です

上座からお父さま、お兄さま、お母さま、私

私は何があってもこれ以上上座には座れません

喜佐子 懐かしいわね

長吉 そういえばそうだった

千代子 うちが囲炉裏だったからなあ

長吉 囲炉裏！？

千代子 見たことないです！

長吉 普通の田舎の家さ

千代子 そこが一番温かいしね

長吉 囲炉裏にも上座とかあるんですか？

千代子 もちろんあるさ

長吉 僕は三男だから、一番下座だったね

千代子 男の子なのにな？

長吉 次男以降はみんな一緒さ

千代子 下座は薪をくべたり

長吉 火の管理をしなくてはいけないんだけど

千代子 食べるのに熱中してついついおろそかにして

長吉 こっぴどく叱られたもんだ

千代子 楽しそうですね

長吉 今となってはね

千代子 叔父さまはどうして帽子職人になったんです？

長吉 どうしてかあ

喜佐子戻って来る

喜佐子 そうよねえ

田舎の三男坊にしてはハイカラな仕事よね

長吉 初めは商店に奉公に出ただけど

奉公先の近くにその工房があつてね

帽子つてものを始めて見て、虜になつちまつてね
毎日通つていたら親方に声掛けられてさ

「そんなに帽子が好きか、坊主」つて

当時は職人の数も足りなかつたから

親方が奉公先に話をつけてくれて

その工房に入ることになつたんだ

喜佐子 奉公先がよく許したわね

長吉 奉公先も

付き合いで働かせてくれていただけだからね

やりたいことがあるならそっちの方がいいつて

厄介払いの意味もあつたんだろうけど

千代子 それで職人さんに

長吉 親方は怖い人でさ

こっちは糸針持つてるつてのに平気で頭叩くし

すぐに怒鳴るからお客さんに怖がられるし

喜佐子 それでお客さんの家にあなたが行つていたんでしょ

長吉 そうそう

親方じゃなくて坊主をよこしてくれつていう

お客さんが多くてさ

親方は自分より俺の方が人気があるつて思つて

また当たりがきつくなるから困つたよ

千代子 それで叔母さまと出会つたんですね？

喜佐子 そういうこと

うちも母が親方を怖がってね

長吉さんに来てもらおうようにしていたの

長吉 鹿野家のご贔屓さんだったからね

「絶対へマするんじゃないぞ」って

きつく言われたなあ

千代子 親方は戦争に行くことを反対しなかったんですか？

長吉 したさ

戦争は戦争屋に任せればいいんだって

千代子 戦争屋？

喜佐子 軍人さんのことよ

千代子 なるほど

長吉 帽子屋のすることじゃないって破門にされちまって

千代子 破門！？

喜佐子 大袈裟に言っているだけよ

千代子 はあ

長吉 帰って来て、腕のない姿見せたら泣いてたなあ

千代子 親方はもう引退したんですよね？

喜佐子 そうそう

今は長吉さんの弟弟子にあたる人がやってるのよ

鹿野家にも来るでしょう？

千代子 ええ、でもお父さまは叔父さまの方がよかつたって

長吉 思い出が美化しているだけさ

千代子 そうかしら？

長吉 お兄さんは同情しているのさ

だからそんな気がしているだけ

喜佐子 卑屈にならなくてもいいのに

長吉 そんなことないさ

喜佐子 お父さまだってあなたの腕を認めていたのは確かよ

じゃなかったら結婚を申し出たって

追い返されて終わったはずだもの

長吉 どうかな

喜佐子 どうして素直に褒め言葉を受け入れられないの？

長吉 それを受け入れたところで

僕はもう、職人じゃないからね

喜佐子 そうだけど

長吉 ところで

千代ちゃんは何か相談があるんじゃないのかい？

千代子 え？

長吉 とねさんにも聞いていたんだろう？

何故看護婦になったのか

喜佐子 そう言えばそうね

長吉 何かになりたいのかな？

千代子 黙ってうつむく

長吉 言いたくないならいいんだけど

千代子 私

喜佐子 うん

千代子 職業婦人になりたいの！

喜佐子 うん

長吉 それで？

千代子 それで？

喜佐子 具体的には？

千代子 具体的？

喜佐子 教師とか、タイプライターとか、電話交換手とか

千代子 まだ決めていません

喜佐子 どうして？

千代子 駄目ですか？

喜佐子 駄目よ！ じゃないと盛り上がらないじゃない！

長吉 喜佐子

喜佐子 もう

長吉 ご両親はご承知なのかな？

千代子、黙る

長吉 なるほどね

喜佐子 どういうこと？

長吉 働きたいけど、親御さんを説得できていない、と

喜佐子 そうなの？

千代子 女学校を出たら、結婚しなさいって

長吉 そもそも、どうして働きたいんだい？

千代子 ……楽しそうだから

長吉 働くということは、楽しいことばかりじゃないよ

つらいことだってたくさんあるし

一人前になるには時間がかかる

千代子 わかっています

長吉 それでも？

千代子 それでも

長吉 そうか

まずは、ご両親の説得だね

千代子 そこ！そこを助けて欲しいんです！

長吉 何の仕事をしたいのかもわからないのに

味方にはなれないよ

喜佐子 いいじゃないですか

味方になってあげれば

長吉 仕事によっては賛成できないだろう

喜佐子 賛成できない仕事って？

長吉 例えば・・・飲み屋とか・・・

喜佐子 駄目なんですか？

長吉 店によるけど、駄目だろう

千代子 どうして？

長吉 どうしてって、危ないから

喜佐子 危ない？ 包丁とかがってことですか？

長吉 君たちは、自分たちがどれだけ恵まれているか

全く理解していないんだなあ・・・

喜佐子 どういうことですか？

長吉 とにかく、千代ちゃんは、何の仕事を指すのか

それを考えなさい

千代子 はい

長吉 ここで悩んでもいいし、家に帰ってもいい

まだ若いんだから、ゆっくり考えなさい

千代子 ありがとうございます、叔父さま

喜佐子 さ、話がまとまったところで

寝る支度をしましょう

喜佐子が立ち上がる。

すると、足元がふらつき、その場に座り込む

長吉 喜佐子？

千代子 大丈夫ですか？

喜佐子 大丈夫。ちよっと眩暈がしただけ

千代子 お布団は私が敷いて来ますね

長吉 ありがとうございます

千代子、居間を出ていく

喜佐子 なんだか疲れちゃったわ

長吉 はしやぎ過ぎたんだらう

喜佐子 そうね

長吉 いいじゃないか

それだけ楽しいってことだろう？

喜佐子 そうね

長吉 さ、捕まって

喜佐子は長吉に支えられて立ち上がる

喜佐子 ごめんなさいね

長吉 腕がないからってなめるんじゃないよ

喜佐子 ふふ、そうね

喜佐子は長吉に支えられて居間を出ていく

M②が流れる

○鹿野家

M②が消える

尚一郎が電話をしている

鹿野源一郎(50)の声がする

源一郎 千代子は見つかったのか？

尚一郎 まだです

源一郎 早く見つけろ

そして連れて帰れ

尚一郎 警察に届けた方が早いと思いますけどね

源一郎 鹿野家に泥を塗ることは許さん

尚一郎 泥になりますかね

と言うか俺も仕事に戻りたいんですけど

源一郎 お前の上官には俺から言っておく

尚一郎 そういうことではなく

源一郎 必ず千代子を連れて帰れ

それまで帰ることは許さん

尚一郎 俺のせいじゃないのに？

源一郎 じゃあな

電話の切れる音がする

尚一郎 なんて理不尽な世の中なんだ

尚一郎は立ち去る

○田村家・居間

明かりが朝になる

長吉がちやぶ台に帽子を乗せ作業をしている

千代子が入って来る

千代子 お仕事ですか？

長吉 仕事と言うほどじゃないね

千代子 作っているんですか？

長吉 隠居の暇つぶしさ

千代子 叔母さま、まだ起きていらっしやらないの？

長吉 夏にはよくあることだよ

千代子 そうなんですか？

長吉 よくいるだろう

夏になると、とんと体が疲れてしまう人

千代子 女学校にいますね

梅雨が明けると来られなくなっちゃう人

長吉 それと同じだ

千代子 ふうん

奥から黒田の声がする

黒田 ごめんください

千代子 はい

長吉 悪いね

出てくれるかい

千代子 はい

千代子は居間を出ていく

長吉は作業を続けている

千代子ととねの声がする

千代子 ああ、こんにちは

とね この間はどうも

黒田・とね・千代子が入って来る

黒田 こんにちは

精が出ますね

長吉 こんにちは

そんなんじゃないですよ

黒田 奥さまは奥に？

長吉 ええ、すいませんね

黒田 いえ、仕事ですから

黒田ととねは居間を出ていく

千代子 黒田先生に来ていただいたんですね

長吉 一応ね

千代子 ご病気だったらどうしましょう

長吉 心配性だね

千代子 叔父さまは心配じゃないの？

長吉 心配しても、結果は同じさ

千代子 さっぱりしているんですね

長吉 いい時はいい、悪い時は悪い

それだけさ

千代子 そういふものですかね

叔父さまは診ていただかないんですか？

長吉 今日はね、大丈夫だよ

千代子 まだ腕が痛むんですか？

長吉 まあね

腕がちよん切れているわけだからね

経過観察は必要なのさ

千代子 一生？

長吉 一生、かな

千代子 それは大変

長吉 ずいぶん慣れたさ

千代子 ひどい話ですよ

戦争に勝って、みんなは喜んでるのに

一生懸命戦った叔父さまはこんな目に遭ってる

戦争に行くことは自分で選んだことだ

長吉 文句は言えないよ

千代子 そんなことないですよ

長吉 それにそんなに一生懸命には戦っていないさ

千代子 そうなんですか？

長吉 最初の戦場で爆弾にやられたからね

戦ったのはほんの一瞬だよ

千代子 そういふ問題じゃないですよ

長吉 千代ちゃんは優しいね

千代子 何処がです？

長吉 俺たちのことで怒ってくれる

千代子 当たり前ですよ！

家族なんですから！

長吉 僕たちは家族かい？

千代子 違うんですか？

長吉 そうか。千代ちゃんがそう言うならそうなんだろう

千代子 そうですよ！

長吉 千代ちゃんはすごいね

千代子 何がです？

長吉 光に目がくらんだりしないんだなって思っ

千代子 叔父さま？

とねが入って来る

とね 長吉さん、ちょっといいですか？

長吉 はい

長吉は立ち上がり、黒田と出ていく

とねもついて行こうとする

千代子 あの

とね はい？

千代子 叔母さま、どうですか？

とね 大丈夫ですよ

疲れが出ただけです

千代子 疲れ？

とね 夏は暑いだけで疲れますからね

よくあることです

千代子 本当ですか？

とね ああ・・・それより、聞きました？

佐々木さんちのお隣のお屋敷のこと

千代子 お屋敷？

とね なんでもご婦人が越して来たらしいですよ

千代子 ご婦人？

とね しかも、お一人で

何かあると思いませんか？

千代子 ご病気かしら？

とね それもあり得ますね

千代子 他に何かあるんですか？

とね 決まってるじゃないですか

千代子 何です？

とね お妾さんですよ

千代子 お妾さん？

とね 何処かのお偉いさんが

こっそりお妾さんを囲っていたりして

千代子 そんなことありますか？

とね ありますよお！

地主さんの隣のお屋敷あるでしょう？

あれは政治家のお妾さんのお屋敷なんですよ

千代子 なんでそんなことご存知なんです？

黒田先生が呼ばれているんですか？

とね ああいう家にはお抱えのお医者がいるんですよ

私たちは呼ばれません

千代子 そういうものなんです

とね 千代子さんだって

おうちにはお抱えのお医者がいるでしょう？

千代子 まさか

みなさんと同じように

具合が悪い時だけ来ていただきます

とね あら、意外に庶民的なんですよ

千代子　うちは別段裕福と言うわけではありません
とね　そんなことないと思いますけど

黒田と長吉が居間に入って来る

黒田　失礼だぞ、平山くん

とね　あら、先生

黒田　千代子さん、すみませんね

千代子　いえ、とねさんとお話しするのは楽しいです

黒田　それならよかった

とね　もう終わったんですか？

黒田　君が無駄口叩いている間にね

千代子　叔母さまは本当に大丈夫なんですか？

黒田　大事なよ

千代子さんは優しいね

長吉さん、今日はこれで

長吉　はい、ありがとうございます

黒田　薬、忘れないでくださいね

長吉　ええ、いつも通り

黒田　では

千代子　お見送りします

黒田　いえ、ここで結構ですよ

とね　ありがとうございます

ごきげんよう

長吉　ありがとうございました

黒田ととねは居間を出ていく

千代子　叔母さまは？

長吉　よく眠っているよ

千代子 このまま寝かせてあげよう
はい

お腹空きましたね
お昼の準備しますね
長吉 ありがとうございます

千代子は居間を出ていく。

○道

黒田ととねが歩いている。

とね 大事なくてよかったですね
黒田 そうだな

とね 長吉さんは大丈夫ですかね
黒田 ・ ・ ・
とね 先生？

窪田はつ(20)がキョロキョロしながらやって来る

黒田 どうかしましたか？

はつ え？

黒田 何かお探しのようでしたから

はつ あの

黒田 近くで町医者を営んでおります

黒田と申します

とね こちらは看護婦の平山です

とね こんにちは

とねは頭を下げる

はつ あの、この度こちらに越して来ました

窪田はつと申します

黒田 窪田さん

とね 越して来たって、もしかして佐々木さんのお隣の？

はつ そうです

とね うわあ

とねははつを上から下まで見る

はつ 何か？

とね あ、いえ

黒田 何かお探しだったんですか？

はつ いえ、町のことを知っておこうと思って

ちよつと散歩を

黒田 そうですか

具合が悪い時は、渡邊の隣の家を訪ねてください

私たちはそこにいますから

はつ 渡邊？

黒田 地主です

はつ ああ、わかりました

ありがとうございます

はつは通り過ぎる

とね 見ました？

黒田 見たよ

とね 誰のお妻さんなんですかね？

黒田 平山くん

とね 気になりませんか？

黒田 気になりません

とね ええ、つまらないなあ

黒田 ほら行くぞ

昼までに松田の爺さんところ行かないと

またどやされるぞ

とね はあい

○田村家・居間

長吉が帽子を作っている

千代子が入って来る

千代子 叔父さま、お茶飲みます？

長吉 もらおうか

千代子 はい

千代子はお茶の準備をする

長吉 すまないね

千代子 いいえ

長吉 素麺、美味しかったよ

千代子 褒めても何も出ませんよ

長吉 本当だよ

喜佐子は少し食べられたのかな？

千代子 ほんの少しですけどね

長吉 食べられないよりはマシさ

千代子 叔父さまは何事もいい方に考えるんですね

長吉 そうかな？

千代子 尊敬します

長吉 千代ちゃんに尊敬されるとはな

千代子 本当のことなのに
はい、どうぞ

千代子はお茶を差し出す

長吉 ありがとう

はつの声がする

はつ ごめんください

千代子 はい

誰かしら？

長吉 さあ

千代子は居間を出ていく

長吉はお茶を一口飲むと、作業を続ける

はつと千代子の声がする

はつ 千代ちゃん？

千代子 はっさん？

はつ 久しぶりねえ

ここで何してるの？

千代子 ここは叔父さまのおうちなんです

はつ そうなの？

千代子 どうぞ、上がってください

千代子とはつが居間に入って来る

はつ お邪魔します

長吉 こんにちは

千代子 叔父さま

この方は北村はつさん
その・・・お友達なの
どうも

長吉

はつ 突然すみません

近くに越して来たものでご挨拶をと思ったのですが
まさか千代ちゃんがいるとは

千代子

本当に久しぶり

どうしていたんです？

はつ おかげ様でなんとか元気に

千代ちゃんは？

まだ女学校よね？

千代子

今は夏休みです

長吉 座ったらどうだい？

千代子 あらやだ

はつさんもどうぞ

はつ ありがとうございます

千代子 お茶淹れて来ますね

千代子、居間を出ていく

はつ、座ろうとして、長吉の腕に気が付く

はつ ……

長吉 ああ、すまないね

長吉は右肩を撫でる

長吉 怖いよね

はつ あ、いえ、すみません

長吉 露西亞との戦争だね

はつ ……軍人さん？
長吉 そんな立派なものじゃないさ
はつ ご苦労さまです
長吉 ありがとうございます

千代子、湯呑を持って戻って来る

千代子 お待たせしました

はつ 千代ちゃんは、ここで何をしているの？

千代子 何と言われても……

叔母さまとお料理したり

お洗濯したり

あとは畑を手伝ったり

あと、叔父さまのお仕事を手伝ったり

だから、仕事と言うほどのことじゃない

陸軍大将の娘がそんなことしているの？

千代子 そうですよ

何かおかしいですか？

はつ あ、いや、別に

長吉 この家はね、そういう家なんだ

それぞれができることをする

僕も腕がこんなだからね

できることは少ないけど

千代子 叔母さまは陸軍大将の妹ですけど

立派な大根を育てるのが得意です

長吉 確かにな

はつ そうですか

千代子 はつさんはどうしてこちらに？

はつ その……

夫があまりに忙しいので

たまにはのんびりしようということになって

先私がお屋敷を整えておこうと思つて

千代子 そうか、はつさんご結婚されたんですよね

はつ ええ、今は窪田はつ

千代子 じゃあそのうちご主人にお会いできるんですね

はつ ええ、もちろん

千代子 ご主人は何してる方なんですか？

はつ 洋服の製造と販売の会社をやっています

千代子 じゃあ叔父さまも知っている方かしら

長吉 僕が帽子職人だったのはもう二十五年も前の話だ

はつ 帽子職人だったんですか？

長吉 今はこのざまだけどね

千代子 叔父さまの帽子も売ってもらえればよかつたのに

長吉 もしもの話は疲れるだけだよ

はつ 千代ちゃん

千代子 はい？

はつ 尚一郎さんは？

千代子 生きていますよ

長吉 どういう答えなんだ

はつ ご結婚された？

千代子 そんなわけないじゃないですか

縁談を壊すのがあの人の趣味なんですから

長吉 まだ抵抗しているのか、尚一郎は

千代子 わがままなんですよ

「あそこの令嬢は顔が好みじゃない」とか

「背が高い女は嫌いだ」とか

「声が甲高い女とは暮らせない」とか

はつ そうですか

長吉 はつさんは・・・

はつ はい？

長吉 いや、何でもないよ

長吉は立ち上がる

千代子 叔父さま？

長吉 ちょっと出かけてくるよ

千代子 どちらへ？

長吉 電話を借りに渡邊さんところ行って来る

千代子 お気を付けて

長吉 はっさん

はっ ゆっくりして行ってね

はっ ありがとうございます

長吉は居間を出ていく

はっ 女学校はどう？

千代子 みんな元気？

はっ 何人かはお嫁に行きましたけど

はっ みんな相変わらずです

はっ 先生方は？

千代子 校長先生が変わりました

はっ 本当？

千代子 私もすっかり過去の人だわ

はっ そんなことありませんよ

はっ そうだ、千代ちゃんが一番仲の良かった

はっ えっと・・・

千代子 ・・・・美祢子ちゃん

はっ そう、美祢子ちゃん

千代子 元気？

千代子 お嫁に行つて、遠くへ行きました

はつ そうなの

じゃあなかなか会えないのね

千代子 ええ、また会おうねって約束したんですけど
はつ 寂しいわね

二人の会話は続いて行く

○電話

長吉は電話をかけている

尚一郎が電話を取る

尚一郎 もしもし、叔父さん？

長吉 ああ、尚一郎
すまないね

尚一郎 久しぶり、元気？

長吉 変わらないよ

尚一郎 叔母さんは？

長吉 今は寝込んでいるよ

尚一郎 大丈夫なの？

長吉 疲れが出ただけだ

尚一郎 ならいいんだけど

で、どうしたの？

長吉 実はね、千代ちゃんのことなんだけど

尚一郎 え、千代子そっちにいるの？

長吉 知らなかったのか？

尚一郎 あいつ・・・

おじさん、すまなかったな

すぐ迎えに行くよ

長吉 うちには別に構わないけど

尚一郎 いや、すぐ行くから

長吉 そうかい

じゃあ待つてるよ

長吉は電話を切り、立ち去る

尚一郎は電話を切るが、その場に佇む

尚一郎 叔父さんちだったか・・・

○田村家・居間

千代子と喜佐子とはつが喋っている

喜佐子 この間はごめんなさいね

折角ご挨拶に来てくださったのに

はつ いえ、おかげんいかがです？

喜佐子 おかげさまで

いやね、歳を取ると暑さにもやられちゃって

千代子 はつさんはもう落ち着いたんですか？

はつ ええ、だいぶね

千代子 じゃあ、旦那さまももうすぐ？

はつ 主人は急に大きな仕事が入ったとかで

しばらく来られないって

喜佐子 それは残念ね

千代子 はつさんは戻らなくていいんですか？

はつ 大丈夫

それより主人がいつ来てもいいようにしてなくちゃ

千代子 寂しいですね

はつ そんなことないわ

毎日主人が来たら何しようって考えるのは楽しいわ

喜佐子 いいわね

千代子 叔母さまはいつも叔父さまと一緒にじゃないですか

喜佐子 いつも一緒だからこそ

はつ たまには違うことしたいわね

はつ 何処かおでかけされたりしないんですか？

お芝居とか、寄席とか

喜佐子 あの人は何処へ行っても目立つからね

千代子 そんなに目立ちます？

喜佐子 人目を気に病んでしまうから

はつ 何処か行ってみたい場所とかないんですか？

喜佐子 そうね

死ぬまでに一度、お伊勢さんには行ってみたいかな

千代子 いいじゃないですか！ 行きましようよ！

はつ そうですよ

千代子 ついでに温泉に行ったりとか

叔父さまの体にもいいかもしれませんよ

喜佐子 駄目よ

あの人を人目にさらすなんて

絶対駄目

はつ もつたいない

喜佐子 もつたいない？

はつ そうですよ

行きたい場所があつて

一緒に行ける人がいるのに行かないなんて

もつたいない

千代子 そうですよ

会いたくても会えない人だっているのに

はつ そうそう

喜佐子 だとしても、駄目よ、絶対

長吉が入って来る

長吉 盛り上がっているね

はつ あ、お邪魔しています

長吉 こんにちは

千代子 お出かけですか？

長吉 ああ、ちよつと囲碁に行つて来るよ

千代子 叔父さま囲碁なんて打つんですか？

長吉 黒田先生の紹介でね

近所のじいさんたちとやっているんだよ

今のところ、僕が最年少

千代子 若手なんですね

長吉 だから行かないと寂しがられてね

じゃあ行つて来るよ

喜佐子 気を付けて

長吉は居間を出る

はつ 大丈夫そうですけど

喜佐子 何が？

はつ 人目

喜佐子 そう？

はつ 私も初めてお会いした時は驚きましたけど

とても穏やかな方ですし

今もこうやってお友達がご近所にいるんでしょう？

大丈夫じゃないですか？

喜佐子 ここにはもうずいぶん長く住んでいるんだもの

他所でうまく行くとは限らないわ

千代子 うーん・・・

尚一郎の声がする

尚一郎 こんにちはー！

千代子 この声は・・・

喜佐子 はーい！

喜佐子は立ち上がり、玄関へ向かう

千代子も立ち上がり、居間を出ようとするが

千代子 ああ、どうしましょう

はっ 千代ちゃん？

千代子は隠れられそうな場所を探している

喜佐子 あらー、ビックリしたわあ

大きくなっちゃって

尚一郎 変わってないよ、叔母さん

はっ え？

千代子、無理矢理隠れようとする

尚一郎・喜佐子、居間に入って来る

喜佐子 千代ちゃん、お兄さん来たわよ

千代子、隠れようとしているが、隠れていない

尚一郎 お前、何やってるんだ？

千代子 ごきげんよう、お兄さま

尚一郎 帰るぞ、千代子

喜佐子 もう帰るの？

ご飯食べて行ったら？

千代子

私はお夕飯のお手伝いがありますから

お兄さまお一人でお帰りください

尚一郎

お前なあ

はつ

尚一郎さん

尚一郎、はつに気が付く

尚一郎

・・・はつさん

○道

黒田が現れる

長吉も現れる

黒田

長吉さん、こんにちは

長吉

おや、こんにちは

黒田

そうか、今日は囲碁の日ですね

長吉

そうなんですよ

黒田

長吉さんのおかげで爺さんたちはすっかり元気です

長吉

言い過ぎですよ

黒田

顔色よさそうですね

長吉

ありがとうございます

黒田

喜佐子さんは？

長吉

もう起き上がって

黒田

今日は千代子と窪田さんとおしゃべりしています

窪田さん？

ああ、この間越して来た

長吉

そうです

黒田

あの人も可哀想ですね

長吉 何がです？

黒田 あれ？ ご存知ない？

○田村家・居間

尚一郎・喜佐子・千代子・はつが座っている

尚一郎 まさかここで千代子とはつさんが揃っているとは

喜佐子 尚一郎さんもお知り合いだったのね

尚一郎 ええ、まあ

千代子 何しに来たんですか？

尚一郎 お前を回収しに来たんだよ

千代子 私は物じゃありません！

尚一郎 叔母さん、すまなかつたな

こいつの面倒見るの大変だっただろう？

喜佐子 いいえ、毎日楽しいわよ

尚一郎 体調は？

喜佐子 見ての通りよ

千代子 どうして叔母さまが寝込んでいたこと

知っているんです？

尚一郎 叔父さんから聞いたんだよ

お前のこともな

千代子 叔父さま、なんてことを・・・

尚一郎 職業婦人だなんて本気で言っているのか？

千代子 本気です！

尚一郎 成績も中の下

料理も掃除も苦手なお前がどんな仕事するんだよ

千代子 お裁縫なら得意です！

尚一郎 じゃあミシンできるのかよ

千代子 ミシン・・・？

尚一郎 触ったことないだろう

千代子 ……はい

喜佐子 いいじゃないの

これからゆつくり考えれば

はつ 千代ちゃんも職業婦人になりたいの？

千代子 ……はい

尚一郎 嘘つけ

こいつは、職業婦人になりたいわけじゃないんだ

はつ どういうことですか？

尚一郎 朝鮮に行きたいだけだ

そうだろうか？

千代子 ……

喜佐子 朝鮮？

何のために？

尚一郎 嫁いだ友達がご主人と一緒に挑戦に行っただけです

その友達が挑戦で友達ができなくて寂しいって

手紙を送って来たから会いに行きたいだけなんです

千代子 ……

尚一郎 何処かへ嫁いだら朝鮮なんて行けっこないし

だから職業婦人になって

朝鮮に行こうって魂胆なんです

喜佐子 すごいわねえ

尚一郎 でも甘いんですよ

職業婦人になったって朝鮮に行けるわけじゃない

千代子は泣きそうになっている

尚一郎 お前が挑戦に行くのは無理だ

諦めろ

はつ 尚一郎さん

千代子 どうしてお兄さまはいつも

無理だつて決めつけるんです？

尚一郎 無理なものは無理だ

千代子 ちよつとは私の気持ちを考えてくれても

いいじゃないですか

尚一郎 そんな必要はない

朝鮮には絶対行かせない

働かせもしない

以上だ

千代子 お兄さまの・・・鬼ジジイ！

尚一郎 はあ！？

千代子は飛び出して行く

喜佐子 千代ちゃん！

喜佐子は千代子を追いかけて行く

尚一郎 あいつ・・・本当に十六か・・・？

はつ 尚一郎さん

どうしてそんなこと言うんです？

尚一郎 朝鮮は駄目だ

はつ どうしたんですか？

尚一郎さんらしくない

尚一郎 俺らしいってどんなんです？

はつ どんなつて言われても・・・

二人とも黙り込む

尚一郎 俺も追いかけるとするか

尚一郎が立ち上がる

はつ 待って

尚一郎 何です？

はつ どうしてそんなよそよそしいんです？

尚一郎 上司の娘さんでよその奥さまだ

そりゃあよそよそしくなるでしょう

はつ そんな人だと思わなかった

尚一郎 ……男運がなかったですね

尚一郎は居間を出ていく

○道

千代子が息を切らしている

千代子 はあ、はあ、はあ

あああ、もう！

私服のとねが通りかかる

手には買い物籠を持っている

とね 千代子さん？

千代子 とねさん

とね どうしたんです？

大きい声出して

千代子 むしゃくしゃして……

とね むしゃくしゃ？

千代子 お兄さまが……

とね お兄さんが？

千代子 ああもう！

とね 落ち着いて、ね？

喜佐子の声がする

喜佐子 千代ちゃん！

喜佐子がやって来る

喜佐子 千代ちゃん

よかった追いついた

とね 喜佐子さん！

走って来たんですか？

喜佐子 走るってほどじゃないわ

急いで来ただけ

とね 大丈夫ですか？

喜佐子 大丈夫大丈夫

千代子 叔母さま、お兄さまは？

喜佐子 さあ？

千代子 はつさんと置いて来たの？

喜佐子 ……多分

千代子 そうですか……

とね はつさんって越して来た方でしょう？

喜佐子 ええ

とね 仲良くなったんですか？

千代子 もともとお友達なんです

とね え、そうだったんですか？

……お気の毒ですよ

千代子 何がです？

とね 愛人が男の子産んじやうなんて運がなかったですね
喜佐子 何の話？

とね だから、はつさんは旦那さんの愛人が
男の子産んじやったから

追い出されたらしいじやなですか

千代子 え？

とね 知らなかったんですか？

喜佐子 旦那さんは後から来るって

とね そんなわけないですよ

跡継ぎが生まれたばかりなんですから

千代子 離縁はしないんですか？

とね さあ？

本人に聞いてみたらどうですか？

喜佐子 そんなこと言ってもねえ

千代子 ……帰りましょう

千代子が歩き出す

喜佐子 ちよつと

とね 千代子さん！？

三人、立ち去る

○田村家・居間

はつが一人でぼんやりしている

長吉の声がする

長吉 ただいまー

はつ 帰って来た！

長吉が居間に入って来る

長吉 ただいま

はつさんだけかい？

はつ ええ

長吉 すまないねえ、留守番させちゃって

喜佐子と千代ちゃんは？

はつ えっと・・・お散歩かな？

長吉 散歩？ 珍しいな

はつ 色々ありまして

長吉 ・・・・はつさん

はつ はい？

長吉 ああ・・・その

はつ なんです？

長吉 ここには、好きだけいていいからね

はつ どうしたんです？

長吉 ほら、千代ちゃんが帰っちゃうと

寂しくなっちゃうしね

喜佐子も話し相手が欲しいだろうし

はつ ・・・・ありがとうございます

長吉 うん

千代子・喜佐子・とねの声がする

千代子 戻りましたー

喜佐子 ただいまー

とね お邪魔しますー

千代子・喜佐子・とねが入って来る

長吉 お帰りなさい
喜佐子 あら、帰ってたの？
長吉 ちようど今ね
とね こんにちは
喜佐子 とねさんも来たの？
とね 流れで
千代子 はっさん
はっ はい？
千代子 ・・・お夕飯、何がいいですか？
長吉 もうそんな時間か
はっ 私は家で食べますよ
喜佐子 いいわよ
せつかくだからみんなで食べましょ
とねさんもよかったら
とね いいんですか？
喜佐子 みんなで食べた方が楽しいからね
とね ありがとうございます！
喜佐子 それで、何にする？
千代子 はっさんが、決めてください
はっ 私？
千代子 はい
はっ じゃあ、ライスカレー
千代子 ライスカレー・・・
とね 何それ？

M③が流れる

千代子・喜佐子・はっ・とねは夕食の支度に行く
長吉はノートをちやぶ台に広げ、帽子を描いている

○道

尚一郎が千代子たちを探して歩いている

○田村家・居間

M③が消える

千代子が居間に入って来る

千代子 もうすぐできますから

長吉 ライスカレーはできるのかい？

千代子 そんなの無理ですよ

今日は煮物とお魚です

長吉 冷ややっこもあるといいな

千代子 いいですね

叔母さまに言ってみます

千代子はノートをのぞき込む

千代子 新しい帽子ですか？

長吉 へたくそだろう？

左手だから思うように描けなくて

千代子 でも、わかります

長吉 これはね、つばを大きく取るんだよ

それで、飾りには真っ白な羽根をつけて・・・

千代子 素敵ですね

ここにリボンをつけたらどうですか？

長吉 ああ、それはいいね

尚一郎が入って来る。

尚一郎 腹減った・・・

長吉 尚一郎、来ていたのか

尚一郎 叔父さん、久しぶり

千代子はそっぽを向いている

尚一郎 千代子、いるのかよ

長吉 聞いたよ

探していたのか？

尚一郎 家出からの家出かと思った

千代子 私、お台所に戻ります

尚一郎 おい、千代子

千代子は出ていく

尚一郎 ったく

長吉 ずいぶん歩いて来たんだな

尚一郎 全然見つからなかったからな

長吉 さすがに人妻になった元婚約者と二人になるのは
気が引けたか？

尚一郎 え？

長吉 はっさん

お前の許婚だった人だろう？

尚一郎 なんだよ、叔父さん知っていたのかよ

長吉 話を聞いていて思い出した

尚一郎 これ以上、変な噂が立ったらよくないだろう

長吉 そうだな

ご主人のこと、広まっているのか？

尚一郎 面白おかしく書かれているからな

成金のおっさんが

若い軍人の娘と結婚したと思ったら

芸者に手を出して跡継ぎ誕生ってな

本妻は追い出されて妾が嫁面してるってさ

新聞も無責任だな

長吉
尚一郎
人の不幸は蜜の味ってね

長吉
後悔してないのか？

尚一郎
まさか

俺に嫁いでいたら今頃もっと不幸だった

長吉
わからないだろう、そんなこと

尚一郎
軍人の嫁なんてなるもんじゃない

長吉
それは、僕たちのことか？

尚一郎
叔父さんは結婚する時、軍人じゃなかっただろ

長吉
でも、職人でもなかった

尚一郎
それでいいんだよ

叔父さんは生きるために生まれた人なんだから

長吉
みんなそうだろう？

尚一郎
俺は死ぬために生まれたんだ

長吉
どうして？

尚一郎
軍人ってのはそういうもんだ

生きるためには生まれていない

俺は特に三代目だし

長吉
そんなことないだろう

尚一郎
あるさ

毎日、どれだけキレイに死ぬるかかって考えている

長吉
尚一郎

尚一郎
千代子は軍人以外と結婚した方がいい

官僚とか、そういうのがいい

絶対朝鮮には行かせない

長吉
何かあるのか？

尚一郎 またきつと戦争は起こる

その時あの場所は危ない

敵地とつながっているんだ

長吉 今は景気もいいし

みんな喜んで朝鮮に向かって行くけどね

尚一郎 調子は上がっていったらあとは落ちるもんだ

上がった分が大きいほど落ちるのも大きい

長吉 確かに、でも

尚一郎 でも？

長吉 落ちた調子はまた上がるもんさ

尚一郎 ……そうだといいけどな

はつが台拭きを持って来る

はつ ちやぶ台拭きますね

はつは尚一郎に気が付く

はつ 戻ってらしたんですか

尚一郎 ああ

喜佐子が居間に顔を出す

喜佐子 尚一郎、よかった

おひつ運んでくれる？

尚一郎 はいはい

はつ 尚一郎さんが運ぶんですか？

喜佐子 だって六人分なんですもの

尚一郎 俺が一番適任だろ

長吉 すまないね

はつ　でも、男性が台所に入るなんて
尚一郎　この家の掟は
「できる人ができることをする」

尚一郎は居間を出ていく

尚一郎(声)　叔母さん、おひつ何処？

はつは呆然としている

長吉　変な家だろう？

○田村家・廊下

喜佐子ととねがお皿を持って出てくる

とね　賑やかですね

喜佐子　そうですね

とね　いつもは静かなのに

喜佐子　二人しかいないからね

とね　うるさいって思ってます？

喜佐子　そんなことないわよ

ただね

とね　何です？

喜佐子　これに慣れてしまったら

みんながいなくなってしまう後が怖いわ

とね　怖いですか？

喜佐子　寂しくて心が碎けるんじゃないかって

とね　大丈夫ですよ

長吉さんも、黒田先生も、私もいなくなりません

喜佐子 ありがとう

でもやんなっちゃうわね

とね 何がです？

喜佐子 幸せの後って必ず不幸が来るでしょう？

だから、幸せな時が一番悲しい

とね うーん、多分ですけど

喜佐子 何？

とね 幸せの後が必ず不幸なら

不幸の後には必ず幸せなんじゃないですか？

喜佐子 そうかしら？

とね そうですよ

それだったら、今の幸せがなくなっても

次の幸せを楽しみにできるでしょう？

喜佐子 そうねえ

とね そうですよ

とねと喜佐子は居間に向かって行く

M④が流れる

○田村家・居間

ちやぶ台を長吉・喜佐子・尚一郎・千代子・はつ・とね
が囲んでいる

喜佐子 煮物召し上がる？

長吉 ありがとう

喜佐子、長吉に煮物を渡す

千代子 お兄さま、お仕事はお休みですか？

尚一郎 今の俺の仕事はお前を連れて帰ることだ

千代子 陸軍が私を探しているんですか！？

尚一郎 お前、いつからそんな大物になったんだ？

千代子 どういうことですか？

喜佐子 お仕事はどう？ もう慣れた？

尚一郎 だいぶね

慣れるしかない

長吉 無理はよくないぞ

尚一郎 しなくていいならしないよ

喜佐子 体には気を付けるのよ

まだ若いって油断しちやだめよ

尚一郎 子どもじゃないんだから

とね この煮びたし美味しいですね

喜佐子 あら、じゃあ今度作り方教えてあげましょうか？

とね ありがとうございます！

是非！

喜佐子 そうだ ぬか漬け持って行く？

とね いいんですか？

ありがとうございます！

はっ、長吉をじっと見ている

千代子 お口に合いませんか？

はっ あ、いえ、とても美味しいです

とね 喜佐子さん

お味噌汁まだありましたよね？

いただいてもいいですか？

喜佐子 いいわよ

とね 良ければお持ちしますよ

尚一郎 お願いします

とね、汁椀を持って出ていく
尚一郎、千代子を促す

千代子 叔父さまもいりますか？
長吉 ありがとう

千代子、汁椀を持って出ていく
会話が続く中、ゆっくり明かりが変わって行く
M④が消える

○黒田診療所

黒田がカルテを見ている
とねが入って来る

とね おはようございます

黒田 おはよう

とね 先生、聞いてくださいよ

黒田 嫌だ

とね ちよつと

黒田 お前のその話の始まり方は大抵面白くないから嫌だ
とね 昨日ね
田村さんちでお夕飯をいただいたんですよ
聞かないって言っているだろう

黒田 でね、そこにはつさんと
とね それから千代ちゃんのお兄さまも
いらっしやっただんです

黒田 お兄さん？

とね シュツとした素敵な方でしたよ

陸軍にいらっしやるんですって

黒田 会ったことあるよ

とね そうなんですか？

黒田 千代子さんは女学校に入ってから

来てなかったらしいけど

お兄さんは時々いらしてたからね

とね どうして？

黒田 心配だったんじゃないか？

二人の体調のことも知っていたみたいだし

とね 千代ちゃんには知らないの？

黒田 “知らない人” って必要なんだよな

とね 知らない人、ですか？

黒田 知らない人が一人でもいれば

その事實はあたかもなかったかのように振舞える

とね だから、千代ちゃんにだけは知らせない、と

黒田 あのご夫婦にとつては

それが救いだっただらうさ

とね 面倒くさいですね、人間って

黒田 それが楽しいんだよ

あ

とね 何です？

黒田 結局聞いてしまった・・・

とね 私の話術が上手いから

黒田 無駄口叩いていないで仕事だ

とね はあい

黒田ととねは部屋を出ていく

○田村家・居間

千代子のはたきをかけている
帽子のほこりを取りながら
ふと、赤い帽子に目が留まる
そして、赤い帽子を手に取り一回転する
その様子を尚一郎が入り口から見ている

尚一郎 何やっているんだ？ お前

千代子 はうんざりした顔をする

千代子 お兄さまって本当、間が悪いですよね
尚一郎 悪かったな

千代子 は帽子を戻し、はたきを再開する

尚一郎 お前、それが何の帽子かわかってかぶったのか？
千代子 え？

尚一郎 その帽子は
叔父さんが初めて叔母さんに作った帽子だ
そうなんですか？

尚一郎 昔は叔母さんも洋服着てたんだけどな
すっかり着なくなったな

千代子 どうしてです？

尚一郎 帽子をかぶらなくていいからじゃないか？

千代子 帽子はこれだけあるじゃないですか

尚一郎 どうしても古くなって行くだろう？

千代子 そうですね

尚一郎 帽子が古くなるにつれ

叔父さんが帽子を作れないという事実が
大きくなつてつちやつたのかもな

千代子 うーん・・・

はつの声がする

はつ こんにちはー

千代子 はつさんだ、どうぞー！

はつが居間に入って来る

はつは手ぬぐいのかかった籠を持っている

はつ お邪魔します

千代子 こんにちは

はつ 今日はね

主人のところからこれを持って来てもらったの

はつは手ぬぐいを取る

千代子 わあ、卵

はつ 牛乳もあるのよ

千代子 すごい、よく手に入りましたね

はつ たまには贅沢しなきゃね

千代子 いいですね

何にします？

はつ プリン、作ってみない？

千代子 プリン！？

尚一郎 おいおい、大丈夫なのか

はつ うちの料理長にね

簡単に作れる洋食ない？って手紙出したら

プリンは簡単ですよって

はつはメモを取り出す
千代子はのぞき込む

千代子 確かに、これなら作れそうですね

尚一郎 その料理長に来てもらった方が

いいんじゃないですか？

はつ わかつてないですね

尚一郎 何が？

はつ 私は今、とつても暇なんです

暇な女がやることなんて

おいしいもの作ることくらいでしょう？

尚一郎 他にもあるでしょう

お茶とか華とか裁縫とか

はつ 私に何の見返りもないじゃないですか

尚一郎 見返り？

はつ お茶もお華もできてしまったら終わりでしょう？

でもお料理は食べられます

おいしければさらに嬉しいでしょう？

尚一郎 ああ、そうですか

千代子 材料はそろっているんですよ？

はつ ええ、持って来てもらったから

千代子 じゃあさっそく作ってみましょうか

はつ 行きましょう

千代子とはつは居間を出ていく

尚一郎 あのはつさんが料理ねえ

長吉が入って来る

長吉 千代ちゃんとはつさんが

なんだか楽しそうに台所へ行ったな

尚一郎 プリンを作るんだと

長吉 ぷりん？

尚一郎 欧米の菓子だよ

長吉 難しそうなことをするんだね

尚一郎 食わされるのかな

長吉 俺は食べてみたいな

尚一郎 千代子とはつさんが作った料理だぞ

長吉 だから？

尚一郎 女中がいる家で育った二人だぞ

まともな物が出てくるとは思えない

長吉 そうか？

千代ちゃんの料理、美味しいけど

尚一郎 それは叔母さんが見張ってるからだろう

そうだ、叔母さんは？

長吉 喜佐子なら近くの畑の手伝いに行ったけど

尚一郎 叔母さん、そんなことしてるの？

長吉 体を動かすにはちょうどいいしね

おいしいものができると嬉しいって

尚一郎 その発想は同じなんだな

長吉 同じ？

尚一郎 いや、こっちの話

○台所

千代子とはつがメモを読んでいる

千代子 こんすたーち？

はつ どうもろこしのでんぷんですって
千代子 でんぷん？
はつ でんぷんって何かしら？
千代子 さあ？

○田村家・居間

長吉と尚一郎が話している

長吉 いつまでこっちにいられるんだ？

尚一郎 できれば今すぐ帰りたい

長吉 そうか

尚一郎 親父に必ず千代子と一緒に帰って来いって

追い出された

長吉 おやおや

尚一郎 叔父さんは千代子の味方だからな

長吉 いいじゃないか

働いたからって一生お嫁に行かないわけじゃない

尚一郎 千代子の目的は働くことじゃない

長吉 尚一郎

尚一郎 何？

長吉 お前が千代ちゃんを心配しているのはわかるが

闇雲に意見を押し付けてもわかりあえはしない

尚一郎 わかりあおうなんて思っちゃいない

長吉 お前はこれから人の上に立つんだろう？

じゃあちゃんとわかってもらえる人間にならないと

尚一郎 わかって欲しいとは思わない

長吉 それは、努力をしてから言うことだ

努力をしないでそんなことを言うのは怠慢だ

尚一郎 ……叔父さん、厳しいね

長吉 いつからそんな逃げ腰になったんだ

尚一郎 叔父さんが教えてくれたんだよ

幸せは悲しいって

長吉 尚一郎

尚一郎 俺は、幸せになろうとは思わない

だからいい人になろうとも思わないし

嫌われて憎まれるくらいでちょうどいい

長吉 そんなに思い詰める必要が何処にある

千代子とはつが居間に入って来る

千代子 できましたよー！

はつ どうぞ

ちやぶ台にコンスターチ・プリンが置かれる

長吉 どれどれ

尚一郎 俺は絶対に食わないからな！

尚一郎はちやぶ台から距離を置く

千代子 はい、叔父さま

千代子は長吉にプリンとさじを渡す

長吉 ありがとう

尚一郎 待て、お前ら、味見はしたのか？

千代子 してないですよ

尚一郎 なんでだよ

まず自分たちで確かめろよ

はつ 客観的な意見を聞かないと
尚一郎 頼むから先に主観的な意見を持ってくれよ
長吉 いただきます

長吉はプリンを口に入れる

尚一郎 叔父さん！？

千代子 どうです？

長吉 ……

はつ 正直におっしゃってくださいね

長吉 ……美味しい

千代子 ほらー！

はつ そうでしょう！？

尚一郎 嘘だ！

叔父さん、そういう嘘はよくない！

それは優しさじゃない！

長吉 すごいな

こんなのは初めて食べた

はつ どんな感じですか？

長吉 うーん……甘い佃煮……？

尚一郎 それは本当に美味しいのか？

千代子 さあ、お兄さまも！

長吉はさじを進める

千代子は尚一郎にプリンを渡そうとする

長吉 うん、美味しい

尚一郎 嫌だ！ 絶対に嫌だ！

はつ そこまで言わなくてもいいじゃないですか

長吉の手が止まる

長吉 千代ちゃん、水をもらえるかな？

千代子 ? はい

千代子は居間を出る

はつ さあ、どうぞ！

はつは尚一郎にプリンを差し出す

尚一郎 はつさん、俺の話聞いてました？

はつ 大丈夫です 変な物は入ってません

千代子、湯呑を持って戻って来る

千代子 叔父さま、どうぞ

千代子、長吉に湯呑をちゃぶ台に置く

長吉 ありがとう

長吉は湯呑を取ろうとするが、激しく咳き込む

千代子 叔父さま！？

長吉は嘔吐してそのまま倒れる

尚一郎 叔父さん！？

はつ 長吉さん！

尚一郎 千代子！ 手ぬぐいと水、持って来い！

俺は黒田先生呼んで来る！

千代子 は、はい！

はつ 長吉さん、どうしたんですか？

尚一郎 叔父さんの喉が詰まらないように見ていてください

はつ は、はい

尚一郎は居間を出ていく

○道

喜佐子が大きな大根を抱えて
鼻歌を歌いながら歩いている

喜佐子 今日は何にしましょうね

これだけ立派なら長吉さんも喜んでくれるわね

尚一郎が走って来る

喜佐子 あら、尚一郎さん

尚一郎 叔母さん！？

尚一郎立ち止まる

尚一郎 叔母さん、大変だ

喜佐子 どうしたの？

尚一郎 叔父さんが倒れた

喜佐子 え？

M⑤が流れる

尚一郎 とにかく叔母さんは家に帰って

俺は黒田先生を呼んで来る

喜佐子 わ、わかったわ

尚一郎、走り出す

喜佐子 気を付けてね！

喜佐子、急いでいなくなる

○田村家・居間

千代子とはつは泣きそうになりながら

苦しんでいる長吉の側に座っている

千代子 叔父さま、叔父さま、しつかり

はつ 長吉さん、長吉さん

喜佐子の声がする

喜佐子 長吉さん！

喜佐子、居間に飛び込んで来る

喜佐子 長吉さん！

喜佐子、長吉に駆け寄る

喜佐子 どうしたの？

千代子 プリンを作ったんです

喜佐子 プリン？

はっ それを、食べてもらったら、倒れてしまっ

喜佐子 何を入れたの？

はっ うちから届いた卵と牛乳とコンスターチと

あと、お台所のお砂糖を・・・

喜佐子 ……まさか

喜佐子、居間を出ていく

千代子 叔母さま！？

はっ どうしたのかしら？

長吉が咳き込む

千代子 叔父さま！？

喜佐子が瓶を持って居間に戻って来る

喜佐子 これ、使ったの？

千代子とはっは喜佐子の方を見る

千代子 ……はい

M⑤が消える

喜佐子、瓶を握ったまま崩れ落ちる

喜佐子 私のせいだわ

はっ 喜佐子さん？

喜佐子 私が・・・長吉さんを・・・殺した・・・

M⑥が流れる

○在りし日の田村家・玄関先

黒田が現れる

黒田 それじゃあ、お大事になさってくださいね

喜佐子 先生、私はよくなるんですか？

黒田 薬を毎日きちんと、朝昼晩飲んでください

それからしっかりと休養を取って

喜佐子 あの人を、あんな風にしてしまったのは

私ですよ？

黒田 病気のせいで、心が弱くなっているだけです

あなたのせいじゃない

喜佐子 先生、あの人ね、本当にいい帽子職人だったんです

黒田 そうですか

喜佐子 先生、お願いがあるんです

M⑥が消える

黒田 はい

喜佐子 薬をください

黒田 お出しましたでしょう？

喜佐子 違います

黒田 何がです？

喜佐子 あの人を、殺す薬を

黒田 ・ ・ ・

喜佐子 私のせいです

だから、私が殺してあげなくちゃ

黒田
・・・

喜佐子 帽子を作れなくしてしまったのは私だから

私が責任を取らなくちゃ

そうでしょう？ 先生

黒田
・・・

黒田は鞆から瓶を取り出す

喜佐子 これは？

黒田 ひとさじで致死量です

喜佐子 先生・・・

黒田 使ったら、必ず私を呼んでください

喜佐子さんが殺したとわからないようにしますから

喜佐子 ありがとうございます、ありがとうございます

喜佐子は瓶を抱きしめる

黒田 では、お大事に

○在りし日の田村家・居間

喜佐子はお茶を淹れている

長吉は座っている

長吉 黒田先生はいい先生だね

まだ若いのに

喜佐子 若いって言っても私たちと同じくらいでしょう？

長吉 俺たちだってまだ若いさ

喜佐子は瓶を握っている

長吉 薬は飲んだのかい？

喜佐子 これから

長吉 そうか、忘れないようにね

喜佐子 ええ

長吉 神経衰弱なんて、きつとすぐ治る

喜佐子 ……ごめんなさい

長吉 大丈夫 時間なんていくらでもある

喜佐子 ……そうね

長吉 そうだ、何かして欲しいことはないかい？

喜佐子 え？

長吉 俺にできることに限るけど、言ってごらん

喜佐子 やって欲しいこと

長吉 そう

喜佐子 ……じゃあ、帽子を作ってください

長吉 帽子？

喜佐子 作ってください

長吉 無理だよ、こんな腕じゃあ

喜佐子 無理じゃないです

あなたは日本一の職人ですから

腕なんかなくっても作れます

長吉 ……そうかい？

喜佐子 そうでしょう？

長吉 喜佐子言うなら、そうなんだろう

喜佐子 できます 絶対できます

長吉 じゃあ、道具をそろえなくちゃなあ

喜佐子は瓶を長吉から見えないところに置き

お茶を差し出す

M⑦が流れる

喜佐子 どうぞ

長吉 ありがとう

喜佐子 明日も、一緒にいまししょうね

長吉 ん？ そうだね

長吉はお茶をすする

長吉 美味しいね

喜佐子 あと一日

あと一日だけ一緒にいようって思っ

十年以上が経った

この生活は、いつだって終わらせられる

そう思ったら、明日が怖くなくなった

暗転

○田村家・居間

M⑦が消える

明るくなる

千代子がちゃぶ台に向かって座っている

はっはぼんやり帽子を眺めている

はっ 素敵な帽子ね

千代子 そうですね

はっ 長吉さん、本当にすごい職人さんだったのね

千代子 そうですね

はつ ああ、そうか

千代子 何です？

はつ 私、知らなかったわ

千代子 帽子って涙を隠すためにあるのね

はつ どういうことですか？

好きな人と一緒にいる時って

とても寂しいでしょう？

だから帽子を被っておめかしして

涙を隠すんだわ

千代子 好きな人という時は寂しいんですか？

はつ 寂しいわよ

ちっとも分かり合えないんだもの

千代子 そうですか

はつ 素敵ね

はつは赤い帽子を手に取る

はつ 見て

千代子 何ですか？

はつ 帽子のつばって、笑っている口元に似ていない？

千代子 そうですか？

はつ 微笑んでいるんだわ

千代子 帽子がですか？

はつ そう

涙を隠している人間の代わりに

一生懸命笑ってくれているんだわ

千代子 おかしなはつさん

はつ だって、そう思わなきや悲しすぎるもの

千代子 そうですね

尚一郎が入って来る

尚一郎 はつさん、留守番ありがとうございますございました
はつ お帰りなさい

長吉さんは？

尚一郎 まだ、予断を許さない状況だそうです

はつ 喜佐子さんは？

尚一郎 黒田先生のところまで鎮静剤飲んで眠っています

はつ そうですか

尚一郎 いったん帰って休んだらどうですか？

はつ でも、私がプリン作ろうなんて言い出したから・・・

尚一郎 誰も悪くない

はつ 尚一郎さん・・・

尚一郎 また、留守番を頼むことになると思いますから

休める時に休んでください

はつ ……わかりました

千代ちゃん、また来るわね

千代子 ありがとうございます

はつは居間を出る

尚一郎は座る

千代子 お兄さま、朝鮮に行くんですか？

尚一郎 何だよ 藪から棒に

千代子 お母さまがおっしゃっていました

お兄さまはもうすぐ遠くへ行くって

尚一郎 ちよつと遠くに配属されるだけだ

千代子 私、朝鮮に行くのやめます

尚一郎 ……どうした？ 突然

千代子 お手紙が来たんです

尚一郎 朝鮮からだろう？

千代子 そう

亡くなったそうです

尚一郎 え？

千代子 美祢子ちゃん、結核で、亡くなったそうです

尚一郎 ・・・そうか

千代子 私、働きます

尚一郎 そんな必要ないだろう？

千代子 生きているから、一生懸命生きたいんです

尚一郎 働かなくても、一生懸命生きられるだろう

千代子 私、嫌です

不幸になるってわかっているから

幸せに手を伸ばささないなんて、嫌です

尚一郎 千代子

千代子 お兄さまみたいに逃げたりしません

できることは、ちゃんとやってみたい

尚一郎 俺は逃げたりしていない

千代子 この先誰かと結婚することになっても

ちゃんと責任を持ってその人と一緒にいたい

そのためにまず働いて

自分のために生きてみたい

尚一郎 そうか

千代子 誰かと一緒にいるためにはまず

自分と一緒にいなくちゃいけないんですね

急に大人みたいなこと言うなよ

千代子 そっちこそ

いつまでも子ども扱いしないでくださいよ

尚一郎 叔父さんたち、早く帰って来るといいな

千代子 珍しいですね

尚一郎 何が？

千代子 お兄さまが前向きなこと言うから
尚一郎 珍しくそんな気になった

○黒田医院・廊下

とねが病室から出てくる

黒田が廊下を歩いて来る

黒田 平山くん

喜佐子さんは？

とね よく眠っています

黒田 そうか

とね 長吉さんは……？

黒田 変わらずだ

とね そうですか

……どうしてですか？

黒田 何がだ？

とね どうして喜佐子さんに毒なんて渡したんです？

黒田 ……それしかなかった

とね 気分が軽くなる薬だと言って

長い間漢方を飲ませて

挙句の果てに毒を渡すなんて

それでも医者のことですか？

黒田 平山くん

とね 私、先生はもつと

患者さんに寄り添うお医者だと思っていたのに

黒田 ……医者は科学とともにある

とね その通りです

黒田 だが、今私は祈るしかない

とね ……無力です

黒田 平山くん

とね 何です？

黒田 話がある

ついて来てくれ

黒田は足早に立ち去る

とねはついて行く

○田村家・居間

千代子が出かける準備をしている

はつが入って来る

はつ 千代ちゃん

千代子 はつさん

はつ ごめんなさい

勝手に入って来ちゃった

千代子 それくらい大丈夫ですよ

はつ 喜佐子さん、戻って来るって？

千代子 ええ、すみませんが、留守番お願いします

はつ 任せて

千代子 ……叔母さま、泣いているかしら

はつ そうね

千代子 私、全然想像がつきません

はつ 想像？

千代子 殺したいくらい好きだなんて

はつ 殺してやればよかったんだわ

千代子 叔父さまに死ねとおっしゃるの？

はつ 違うわ こっちの話

千代子 ……そうですか

尚一郎が入って来る

尚一郎 千代子、行くぞ

はつ 尚一郎さん

尚一郎 はつさん、悪いな

はつ いえ

千代子 じゃあ、行って来ます

はつ 行ってらっしゃい

尚一郎・千代子、居間を出る

はつ、居間で一人座る

はつ 初めてだわ

一人でこんな風に過ごすの

○道

千代子・尚一郎・喜佐子が歩いている

千代子 叔母さま、食べたいものありますか？

喜佐子 今は、そんな気分じゃないわ

千代子 じゃあ戻ったら、横になります？

喜佐子 ……どうして優しくしてくれるの？

千代子 だって叔母さまだもの

喜佐子 人殺しよ

尚一郎 まだ死んでないよ

喜佐子 でも、殺そうとした

尚一郎 叔母さんが毒を飲ませたわけじゃない

千代子 ……殺したというなら、私たちだわ

尚一郎 千代子
千代子 叔母さま、私思ったの

M⑧が流れる

喜佐子 何？

千代子 幸せになりたいって思うから

不幸が怖くなるんじゃないかって

喜佐子 どういうこと？

千代子 幸せって、求めるものじゃなくて

死ぬ時に「ああ、幸せだったな」って思えば

それで上出来なんじゃないかって

今がどうであっても

未来がどうであっても

最期に決めればいい

尚一郎 お前は時々妙に賢そうなことを言うな

千代子 馬鹿にしています？

尚一郎 今はしてない

千代子 もう！

喜佐子 私、幸せだったかしら

千代子 どうなんです？

喜佐子 今は何も考えられないわ

M⑧が消えていく

千代子 ……そうですか

お兄さまは？

今死んだら幸せだったと思います？

尚一郎 いや、思わない

千代子 ちよつと

尚一郎 いっそ、殺されてやれたら幸せだったかもな
千代子 何の話ですか？

尚一郎 こっちの話

千代子 お兄さまの考えていることってちつともわからない

尚一郎 わかつてもらおうとは思わない

千代子 それって寂しくないですか？

尚一郎 ……だから叔父さんは

わかりあえるように努力しろって言ったんだな

千代子 一人でしゃべらないでください！

尚一郎 ほら、はつさん待たせているんだから行くぞ

尚一郎は一人で歩き出す

千代子 ちょっと！

叔母さま、行きましよう

喜佐子 ええ

千代子と喜佐子も立ち去る

○田村家・居間

居間には黒田が一人で座っている

尚一郎が入って来る

尚一郎 先生、お待たせしました

黒田 すみません、お手数をかけまして

尚一郎 いえ

尚一郎は座る

はつが入って来る

はつ お邪魔します

はつも座る

喜佐子が千代子に連れられ入って来る

千代子 お待たせしました

喜佐子 先生・・・

喜佐子と千代子も座る

喜佐子 主人はその後、どうなのでしょう？

黒田 まだ、目を覚ましていません

喜佐子 そうですか

黒田 今は、大学病院に勤めている同期に
診てもらっています

尚一郎 偉い先生が来てくれているということですか？

黒田 町医者では限界がありますので・・・

沈黙が流れる

黒田 本当に・・・申し訳ありませんでした

黒田は土下座をする

千代子 黒田先生！

喜佐子 やめてください

悪いのは私なんですから

黒田 違います

喜佐子 え？

黒田 ああの薬は、毒なんかじゃないんです
尚一郎 どういうことですか？

黒田 あれは、ただの砂糖です

千代子 砂糖・・・

はつ そう、そうですよね

尚一郎 はつさん？

はつ だって、どう見ても砂糖でしたもの

だから、プリンに入れたら美味しいだろうって

黒田 その通りです

だから、喜佐子さんも千代子さんもはつさんも

悪くないんです

悪いのは私です

喜佐子 あれは・・・砂糖・・・？

黒田 ああの時の喜佐子さんを見て

もしも私が薬を渡さなかったら

他の人に同じことを言うかもしれない

そうしたら本当に

この人は毒を手に入れてしまうかもしれない

そう思っ、砂糖を渡しました

千代子 先生・・・

黒田 最初は、喜佐子さんから

薬を使ったって連絡が来るのではないかと

気が気じゃなかった

でも、そんな連絡は来ず

少しづつ、少しづつ喜佐子さんは元気になりました

長吉さんの笑顔も増えて

これでよかったんだって思うようにしていました

尚一郎 どうしてすぐ言ってくれなかったんですか？

黒田 興奮状態の喜佐子さんに言っても

信じてもらえないだろうと思ったので

千代子 それはそうですけど・・・

黒田 申し訳ありません

私がつと優秀な医者なら

そんなもの渡さなくても

きつと喜佐子さんを治せたのに

喜佐子 先生、でも私が長吉さんを殺そうと思ったことは

変わらないでしょう？

黒田 それは病気のせいです

喜佐子さんのせいじゃありません

喜佐子 そんな風には思えない

黒田 持つていても使わなかったわけじゃないですか

それが喜佐子さんの答えでしょう？

喜佐子

尚一郎 ちょっと待ってください

黒田 はい

尚一郎 じゃあどうして叔父さんは倒れたんです？

はつ そうですよ

千代子 プリンに変な物は入っていなかったんですよ？

黒田 これは、推測の域を出ないので

尚一郎 何ですか？

黒田 喜佐子さん

長吉さんは卵を食べて

具合が悪くなったことはありますか？

喜佐子

え？
そう言えば、卵食べたことあったかしら

はつ 卵がどうかしたんですか？

黒田 実は、詳しいことはわかっていないのですが

卵を食べると体調に異変を来す人が

一定数いることがわかっています

尚一郎 卵を食べると？

黒田 そうです

今回の長吉さんの症状は

その症例にとっても似ています

千代子 じゃあ、叔父さまは卵を食べて倒れたと？

黒田 まだ研究は進んでいませんが

そういうことではないかと思うんです

はつ 私がプリンを作ろうなんて言ったから・・・

黒田 長吉さん自身が、知らなかったことでしょうか

尚一郎 誰も悪くない

黒田 その通りです

玄関から声がする

とね 先生！

せんせい！！

とね、靴を履いたまま膝立ちでふすまを開ける

とね 大変です！ 先生！

黒田 どうした！？

とね 長吉さんが！

喜佐子 長吉さんが、どうしたんです？

とね 目を覚ましました！！

黒田 本当か！？

とね はい！

今、臨時の先生が診てくれます！

黒田 すぐ行く！

黒田は居間を飛び出して行く

とねも後に続く

M⑨が流れる

尚一郎・喜佐子・千代子・はつも居間を出ていく

○田村家・居間

尚一郎が荷物をまとめている

M⑨が消える

はつが入って来る

はつ 帰られるの？

尚一郎 はつさん

はつ ごめんなさい いきなり

尚一郎 ええ、戻ることになりました

はつ 千代ちゃんも？

尚一郎 千代子は夏休みギリギリまでこちらに

はつ 一緒に帰らないの？

尚一郎 俺は今回の顛末を報告するために一足先に

まだ叔父さんの体調が心配なので

千代子は雑用係として残ります

はつ 雑用係って

尚一郎 叔父さんのお世話は叔母さんの仕事ですからね

はつ 確かにね

尚一郎 はつさん

はつ はい？

尚一郎 俺、朝鮮に配属されることになりました

はつ 朝鮮・・・

尚一郎 いつ、帰って来られるかはわかりません

でも、帰ってきます

必ずここに、帰ってきます

はつ 私は行くところなんてありませんから

ずっと待っています

ここで、お待ちしています

尚一郎 ありがとうございます

では

尚一郎、居間から出ていく

はっ どうぞ、ご武運を

○黒田診療所

黒田がカルテを見ている

とね 先生

黒田 面白くない話は聞かんぞ

とね 聞かなくてもいいからそこにいてください

黒田 は？

とね この間は申し訳ありませんでした

黒田 変なもん食ったか？

とね 私、勝手に思い込みでひどいこと言いました

黒田 先生はやっぱり、患者さんに寄り添うお医者だった

黒田 俺は無力だったただけだ

とね でも、みんな救われたでしょう？

黒田 本当の意味で救えたかどうかはわからないさ

とね 先生は立派なお医者です

黒田 聞かない

とね え？

黒田 面白くない話だから聞かない

とね ちよつと！

黒田 聞かなくていいって言ったのはそつちだろう

さて、午後も忙しいぞ

黒田、立ち去る

とね追いかける

とね はい

○田村家・居間

長吉が帽子を作っている

千代子が入って来る

千代子 叔父さま、体調はどう？

長吉 もう大事ないさ

千代子 まだ寝ていなくていいんですか？

長吉 これ以上は眠れないよ

千代子 そうですか

千代子座る

千代子 叔父さま、私決めたんです

長吉 何になるか、決まったのかい？

千代子 私、帽子職人になります

長吉 ええ？ なんでまた

千代子 私たちに帽子は必要ですもの

長吉 洋装はどんどん増えて行くだろうけどね

千代子 つばは微笑んでいるんですって

長吉 どういうこと？

千代子 私ね、思ったんです

悲しいことも、つらいことも

その人にとっては大切なこともあるんだって
もしも帽子がそういう気持ちを守れるならば
私は帽子職人になりたい

長吉 簡単な仕事じゃないよ

千代子 わかっています

でも

長吉 でも？

千代子 私、お裁縫は得意です

長吉 そうだったね

千代子 それに、叔父さまが大好きな仕事だからきつと
私も大好きになれます

長吉 うちには子どもはいないけど
代わりに君が来たんだね

千代子 何か言いました？

長吉 いや・・・そうだ、朝鮮はどうするんだい？

千代子 行きません

長吉 いいの？

千代子 私は東京で

生きている人のために生きなくちゃ

長吉 ・・・・そうかい

千代子 ね、叔父さま

お父さまの説得、手伝ってくださいる？

長吉 わかった

どれくらい効果があるかはわからないけどね

千代子 ありがとうございます！

私、電話借りてきます！

千代子は居間を出ていく

入れ違いに喜佐子が入って来る

喜佐子 千代ちゃん、どうしたの？

長吉 家に電話をしに行ったよ

喜佐子 あら、珍しい

長吉 帽子職人になりたいそうだな

喜佐子 なんてまた

長吉 それは本人に聞いてみるといい

喜佐子 そうですね

長吉 喜佐子

喜佐子 はい？

長吉 すまなかつたな

喜佐子 何がです？

長吉 心配をかけた

喜佐子 それは、長吉さんのせいじゃありません

長吉 よかつた、戻って来られて

僕はまだしばらくは

喜佐子との何でもない生活を続けたい

喜佐子 ……そうですね

私も、ごめんなさい

長吉 何が？

喜佐子 先生に、薬をお願いしたこと

長吉 驚きはしたけどね

喜佐子 ……ごめんなさい

長吉 神経衰弱が一番ひどかった時

喜佐子が死んでしまうんじゃないかって

それだけが怖かった

だから、よかつた

喜佐子 よかつたですか？

長吉 自分が死ぬことより

僕を殺すことを思いつく人でよかつた

喜佐子 変な人

長吉 元気になったね

喜佐子 ……そうですね

長吉さん

長吉 ん？

喜佐子 お願いがあるんです

長吉 なんだい？

喜佐子 お伊勢さんに行きませんか？

長吉 お伊勢さん？

喜佐子 死ぬまでに一回行ってみたいなって

長吉 いいんじゃないか？

もう少し涼しくなったら

出歩くにも気持ちいいだろうし

喜佐子 死ぬ時に幸せだって思えたら上々なんですって

長吉 死ぬ時？

喜佐子 長吉さん、もしも今死んだら

幸せだったって思います？

長吉 思うよ 間違いない

喜佐子 私もそう思うんです

この先何があってもきつとそう思います

だから怖くても、やりたいことやってみようって

長吉 それがお伊勢さん？

喜佐子 はい

せっかくお伊勢さんに行くなら

熊野も行ってみたいな

喜佐子 ちよつと遠くありません？

長吉 じゃあ熊野は来年にしよう

喜佐子 来年？

長吉 そう 再来年は何処にする？

喜佐子 じゃあ、出雲

長吉 大きく出たね

せめて京都にしないか？

喜佐子 ・ ・ ・ 楽しみですね

長吉 そうだね

Mが流れる

二人の会話が続く中、暗転

了